



書道上に於ける書く技術と,個人の気質,感情及び知能率との相関関係に就いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 邦一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000661

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、 感情及び知能率との相関関係に就いて

山 口 邦 一

北海道学芸大学釧路分校書道研究室

Kunikazu YAMAGUCHI : On the Correlation Between the
Technical Skill and the Personality Including Character,
Feeling and Intelligence Quotient, in Calligraphy.

一 書 と は

ハーバードは、人類思想史の中で最も捕捉し難いものに芸術があるという。書は、プラトンやアリストテレスの言う様に、練習と洞察の集積によつて獲得され、その本質を見ぬいて表現する素朴なそして「性情一不、消息多方」という様な個性表現として、又多分に抽象的、実用的、象徴的、律動的性格を含みながら、宿命的に美の価値とからみあう技術なのである。美とは、ホームやブントの説をもつてすれば、文字を媒介として、気力を抜くことなく、精気を集めて運筆するという様な、能動的な知的活動としての魂の動きであり、文字としての美的過程を知性や情熱に還元した「神情以為精魂」とか「知覚靈変の機」という様な、人類の社会的本能なのであろう。この様な書の考え方は精神面の強調としての書の見方であるが、ヘルダーの様に光と触覚としての文字造型であり、物理的には、リップスの考える様な、線が力学的な力の運動としてのリズムの文字造型なのである。随つて文字を媒介として「梁翰神遊の妙、気韻生動」という様な深い美の内容を重視した書の考え方は、ルソーや、ホイジンゲルの勘、悟性発展の助長と軌を一にしている。近時漸く書くことと人間関係が、心理学や生理学上から研究されているが、毛筆による書くことと性格、感情、一般知能等の関係については、余り究明されていないように思われる。

二 パースナリティ表出としての書

ミシヨンは筆者の内的生活をプロジェクションするものとして動きと型の両面を考え、ジヤミンは筆蹟の要素から筆勢の変化をとり出して、特定の性格特徴は、特定の筆蹟特徴に相互関連するとの仮説の実証を得ることが出来た。ドイツのプレーヤーは、筆蹟が頭脳の動きによるもの、換言すれば中央で組織された作用であるとし、メーヤーは、筆蹟の結合は精神機能の明白な特色であつて、筆者の性格と切り離して考えられないと述べている。クラークスは「表現の科学」の中に表情ある動きの原理をうち立て、表現の基本法則は、各々の目や手、知性的な動きが、心の緊張を現実化しその個性をかりたてると考え、ポプアルは、運動神経上から個人型を筆蹟の運動型と結びつけ、バルバーは、自覚運動と無自覚運動とが、筆蹟型にプロジェクションすると考えた。東洋においても、書と性格、精神性等について論じたものも少くはないが、特に書譜は書論としても有名であり、書の真髄は学者の性格に従つて変ずると説いている。

三 書表現は如何なる様式をたどるか

我々の考えを社会的に価値づけようとする時、そこには何等かの伝達手段が必要であり、古人は種々の記号を創つたが、書は実用の要求から創り出され、その源を自然形象に求めた為に、造型的、抽象的、象徴的、律動的、文学的等の性格となり、複雑な感情思想が簡単な文字の中に含まれる様になつた。書の観察が行なわれる過程については、次の様な説明を考慮する事が可能の様に思われる。即ち我々の眼や手という様な感覚器官に対する刺激としての文字型は、ヘルダーのいう物理的外界の刺激を心的に変える仲介としての光による型であつて、シラーのいう様に感性的本能のような心的印象によつて認知されるものであつて、文字型を通して網膜に感応し、視神経によつて大脳の有線に達し、興奮統理されたものが、知覚認知されるのであろう。随つて線点型の知覚は、常に視神経と中枢要因に関係して考慮されなければならないように思われる。単に目に触れるという物理的実態と、生理的視覚作用としての関係にとどまることなく、精神的所作の一部と見るべきである。その時文字の認知については記憶や連想が関連し、形態或は美的な記憶印象は従来の記憶印象と比較され、新しい認知記憶が形づくられるように思われる。この美的印象のとらえ方には、ホームの考えるような魂の動きとしての情緒、空間性の中の運動のにない手としての線による力学的形態は靈感的視的に、或は理性的形態、更に触覚的形態やその中間的等、種々のとらえ方をしてるように考えられる。

次に文字を書くには、極めて多様な表現様式の中から、自己の欲する線、型、リズム、触圧等を選ぶのであつてその型、線リズム、触圧等は、書く者によつて精神化され、肉体化され力感をもつた運動型として表現される。即ち形態や線、余白の美しさを生命とする書は、精神の衝動を起伏させながら、常視的造型的文字型を専ら線によつて形象化し、視覚的には一筋の意識や知性の流れに沿つて、純粹に時間的精神の推移を特色として、感情は速さ、強さ、筆圧、墨色、均合、安定度を動きとし線は硬軟、粗滑、潤濁、濃淡、滲、太さ、速さ、強弱、軽重等を内容として、可動的状态を示しながら形態を表現して行くのである。

四 テストの根本理念

このテストは、書構成要素の形態、運筆、用筆、全体観というような書表現能力を客観的にテストし、性格、感情一般知能との関連性を考察しようとするものである。書の表現は、視覚、触覚の働きが特に大切であり、書をより正しく美しく表現する為には、より深い注意力、認知力、思考力、記憶力、意志力、器用さ、情緒の安定性が大切だと考えられているが、これらの働きは我々の日常生活をも支配する働きでもある。知覚過程における形、運筆用筆墨色全体性等を視覚的記憶像の中に認知する時、既習の記憶の中にたどりながら、空間的、時間的なものとして把握する様に思われる。その場合形態については、線展開の法則にしたがつて決定的要素としての方向、異化としての曲直線、長短、太さ、墨色の変化、点線の接続交錯から生れる余白結構、扁旁の接近接続等、内面性から発する書の未決定要素としてそれらを包括する知覚の法則に依存するかも知れない人間的知覚の反応なのであろうが、その反応のあらわれ方には前記のような形態触覚反応、触覚形態反応、その中間性反応等種々な反応のあらわれが見られる。感情の世界は観る者に喜びを与へ、共感するものを多く含んでいる。書く者の内なる情緒、知性は感情の波となつて人に迫り、観る人に感動を与へる意志的形態、即ち感動形態が書的美であつて、この美的感動こそが概念を超えたより深い澄み切つた心の上に成りたつものであろう。即ち「筆墨の道は性情に基づいて形態となり、情に任せ性をほしいままにして書かれ」「筆痕は心腕の靈氣に託して書かれる」ものであり、観る書く

動作の種々の反応はウェーナーの感情的知覚論に見られるように、感情的知覚は筋肉緊張や知能的因子と極めて深い関連があり、表現はカントやアリストテレスの考える「多数の器官である」手によつて営まれる文字刺激への同化への努力でもある。触覚としての手は書写する手、知覚する手、理解知識する手即ち外界を直接に知覚する素材であつて、個人的感覚、気質、或は知能的運動因子の総合的結果としての手なのであらう。この様な観点に立つて、

1. 書と気質、感情との関連について
2. 書表現の技巧と一般知能の関連について
3. 手の運動と知能因子の分配との関連について
4. 文字の一つ一つの形の正確さや不規則であることは一般知能や性格、感情と関連はないだらうか
5. 運筆の巧妙さや要素と、一般知能、情格、感情の関連について
6. 墨色と気質、感情、知性の関連について
7. 器用さと表現技巧についての関連について
8. 速さと知性についての関連について

等の究明がなされてよいと考えられる。

五 テストの手続について

第一テストは本学学生を対象とし、書の美的大系について10時間の講義を行い、実技の過程において表現と気質の間に何等かの関連があるとの推定をなし得る節が見出され、更に研究室学生の調査によつて、同一手本による各人の臨書が、各各表現が異なる心的現象と生理現象との間に、何等かの相関があるとの仮定を考慮する事の可能性を確める事が出来たので、観察させた知覚印象と自らの表現による構成美、運筆美、墨色等について、次の様なテストを試みた。

1. 文字を書く時、形態について。(1) 非常に気になる、そんなにならない、ならない、更にその項の形態の良否についての考察。(2) 廟堂碑、九成宮醴泉銘碑、雁塔聖教序、建中帖の何れの形を好むか。(3) 運筆における速遅、律動の何れを好むか。(4) 墨色について潤濃と変化の何れを好むか。(5) 学生の気質についての調査、書表現知覚印象と気質の関連については、カイニ乗の独立性検定により、書の形、運筆、墨色と気質との関連について考察を試みる事とした。

2. 第二テストは、学生高校生を対象として、書構成要素である線の長短、方向、曲直、太さ、速さ、始終筆、軽折、墨色等末決定要素が、我々の感情と如何に関連あるか即ち、これら線の傾向的要素が、知覚による感情的判断、情緒の平衡と、如何なる相関をもつかについて考察しようとするものであつて、感情についての分類は極めて困難であるけれども、+2 (厳肅、熱心、堅い、荒荒しい、強い、有力、怒り、狂暴、いらいらする) +1 (元氣、活潑、興奮、快活、喜び、楽しみ、快愉、面白い) 0 (静、平穩、安らか、温和、やさしさ) -1 (力がない、弱い、せんさい) -2 (悲しみ、陰氣、哀れ、なまけ、ゆううつ) の五段階とし、線の要素についての分種は、各項に記載のように +3, +2, +1, 0, -1, -2, -3 とした。この項の統計は相関係数をもつて、その相関関係を考察した。

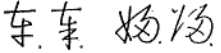
3. 第三テストは、過去二ヶ年間実験的に行い、この統計は三年目のものであつて、次の様な方法によつた。

(1) 視覚による注意力(知覚力)テスト 平均点58点


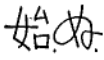
其(廟堂碑)、秋(孟法師)、精(六朝体)、将(サンボウシ)、而(雁塔聖教序)、者(雁塔)、開(建中帖)、不(争座位帖)、成(願文)、墨(書譜の十字として、各文字の形、運筆、用筆、線質

等特異点に着目して、出来得る限りあらゆる面から、その知覚力をみようとした。

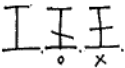
(2) 記憶力テスト 平均点52点

書取、誤字の発見、漢字ふりかなについては、文部省研究録による漢字の書写能力により、三割から六割までの各々二十字とし、書写能力五割のものを中心として出題漢字の読み方について（1字につき三つあげる）例明、日、草書による暗記については  のように間違いやすい文字指導を行い、30分後に、五十字の中から指定した草書を見出すようにした。更に楷書による記憶保持力調べとして、例地、適、信等十字を二十秒見せ、五十字、例地、池、他、敵、摘、適滴等の中に見た漢字に印をつける。統合心理作用として扁、旁、冠等名称について、他に国語、英語の成績を加点、計百点とする。

(3) 思考力テスト 平均52点

判断又は統覚作用としての文字構成について漢字をつくる。諸要素の結合から意味ある体系をつくる。能力として熟語や文章をつくる。迷路としての筆順については草書を使用、漢字構成能力として文字をつくる。例 、美的構成原理として例 大 車 書 上 等から左右均等を見出す。推理力として文字表情と美感情について、文字美的構成による不合理発見、例  他に化学、数学の成績を加点。

(4) 意志力テスト 平均55点

自信力として多くの漢字の中にあつたと思う漢字に印をつける。同一漢字の書字によるあきる時間、複雑な命令による反応として書字動作、例教師の通りに書くこと「うそ」について、例目をかくして必要な線を引く  決断力としての推定(例、書と感情、美について)注意力、思考力、記憶力、器用さ等。

(5) 書技術能力テスト 平均 55.6点

書（廟堂碑）、莫（皇甫府君碑）、善（六朝）、郡（建中帖）、潤（雁塔）、開（季矯詩）、暇（積時帖）、枯（書譜）、清（十七帖）書（李矯詩）の十字とし、形、運筆、用筆、全体観等について出来得る限り幅の広い表現能力をつかみとる様に文字選抜に着目と工夫をした。表現については、教師は大字で一字一字水書で示範を行い、生徒は形態と用筆、運筆、全体観等教師の通りに書く事が要求される。水書の為に示範書は漸次消え失せるので、文字の再生表現には、書表現要因に対する綿密な注意力、記憶力、用筆に対する思考と再生等が要求されるであろうし、表現にあたっては、更に強い意志力や器用さが重要となると思われる。その能力分析表は次の通りであり、評価は二百点とした。

- | |
|--|
| 1. 形態→線の方向、長短、曲直、平向背、勢、間架 |
| 2. 動き→ { 用筆…始終筆、軽折、波法、張力、うまさ
運筆…筆圧、強弱、速さ、流暢さ、筆勢 |
| 3. 全体観→誤字、乱雑、接続、線質、表情性の成巧度 |

(6) 器用さテスト 平均51点

目、冊、は、む、而（雁塔聖教序）、秋便（積時帖）、墨（書譜）、階（争座位帖）、潜（積時帖）の十字とし、一字十点、一字には十箇所に着目点があつて、三十秒間に、手本の通りに五字を書くようにする。

六 結果について

〔1〕 書形態と気質の相関について

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

一表 血液型と形態関連表

形態 血液型	気になる		気にならぬ		男 計	気になる		気にならぬ		男女 計
	良	悪	良	悪		良	悪	良	悪	
A型	17 35.5%	0	1 2.9%	2 5.8%	20	33 34%	2 2%	3 4.8%	2 3.1%	40
	17 21.25%		3 3.75%			35 21.9%		5 3.1%		
B型	8 17.8%	2 4.4%	9 25.7%	1 2.9%	20	20 20.6%	3 3.1%	16 25.4%	1 1.6%	40
	10 12.5%		10 12.5%			23 13.4%		17 16.25%		
AB型	13 30.2%	1 2.2%	5 14.3%	1 2.9%	20	26 26.8%	0	12 19%	2 3%	40
	14 17.5%		6 7.5%			26 16.4%		14 8.7%		
O型	4 9%	0	15 42.8%	1 2.9%	20	13 13.4%	0	23 36.5%	4 6.2%	40
	4 5%		16 20%			13 8%		27 16.9%		
計	42 52.5%	3 3.75%	30 37.5%	5 6.26%	80	92 57.5%	5 3%	54 33.8%	9 5.6%	160
	45 56.25%		35 43.75%			97 60.6%		63 39.4%		

二表

男女 160 男 80

形態 血液型	形態	血液型				血液型			
		A型	B型	AB型	O型	A型	B型	AB型	O型
気になる	良	1	3	2	4	1	3	2	4
	悪	2	1			4	3	2	1
気にならぬ	良	4	2	3	1	4	2	3	1
	悪	4	2	3	1	4	2	3	1

三表 血液型と書表現との関連表

	欧	顔	虞	褚	計	欧	顔	虞	褚	計
A型	15 30%	1 4.35%	23 32.9%	1 5.9%		9 26.5%	3 32%	2 16.6%	1 11%	
B型	15 30%	10 43.5%	13 18.7%	2 11.8%		12 35.3%	3 12%	4 33.3%	1 11%	
AB型	12 24%	3 13%	19 27.1%	6 35.3%		7 20.6%	7 28%	1 8.3%	5 55.5%	
O型	8 16%	9 39%	15 21.4%	8 47.2%		6 17.6%	7 28%	5 41.7%	2 22%	
計	50 31.2%	23 14.4%	70 43.8%	17 10.6%	160	34 42.5%	25 31.3%	12 15%	9 11.3%	80

一表は書表現の場合における、気になる、気にならぬ、血液型との相関表である。カイ二乗による独立性の検定によつて見ると χ^2 は 27.2 となり、自由度は 7,815 であるので、検定の根本原則によつて、形態についての仮定（型による差はない）を棄却し、形態と血液型とは相関があることが理解される。即ち形態について、男女では 60.6%、男は 56.2% が形が極めて気になり、男女 39.4%、男 43.8% が割に形に留意していない。男子は女子に比べて形態に留意していないことが理解出来る。更に二表による各血液型と書形態との関連を見ると、男女共に A 型が、型が気になり、A B 型 B 型 O 型の順位となり、即ち A 型は形態反応を O 型 B 型は触圧型態反応を示している。三表は血液型と書形の好みとの関連である。 χ^2 は男女では 18、男子は 18.4 で、何れも自由度 16.19 より大であり、各家の書形と血液型とは関連のあることが理解される。一般的に形では虞世南や歐陽詢のような整正した形態が好かれ易く、四表からは次のようなことが、推察出来る。

A 型は優しいやゝ曲線的美を好み、情緒が、安定し、形を正確に見るのに反し、運動感覚、墨色感覚のような触覚性が比較的乏しい様であり、B 型は直線的背勢構成による清健なるスタイル、規則的

四 表

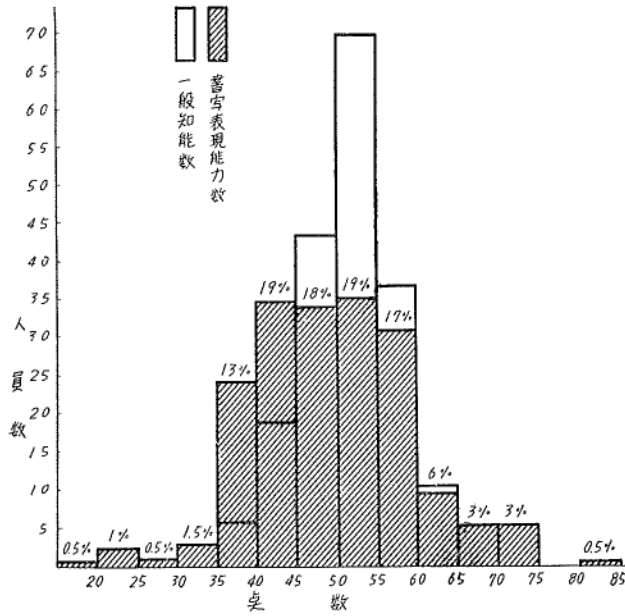
	A型	B型	AB型	O型	A型	B型	AB型	O型
欧	1	1	2	3	2	1	3	4
顔	4	1	3	2	3	2	4	1
虞	1	4	2	3	1	3	2	2
楮	4	3	2	1	3	3	1	2

力を好み、AB型は動きが大きく、リズム的表情性が豊かであつて、曲直の分配空間性に秀で、柔軟性、張力等の豊かなものを好む傾向、O型は動きが大きく向勢的積極的表情、筆圧感、張力性の豊かなものを好む傾向がある様に思われる。

〔2〕 書表現能力と知能との相関について

形態のとり方と知能との相関を考察する前に、テスト三による「書表現能力と一般知能」との相関に

五表 一般知能 } 度数分布図
書表現能力 }



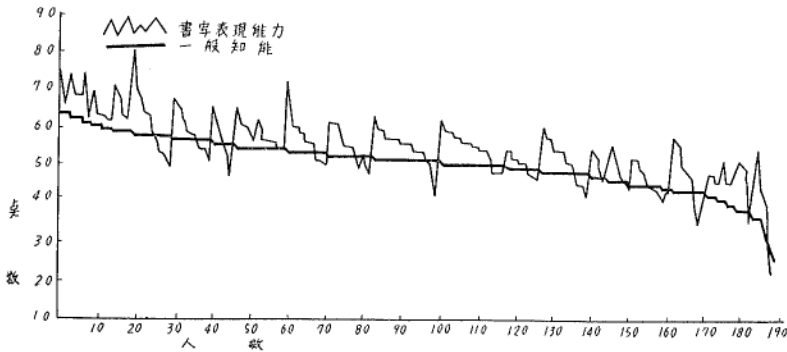
六表 一般知能と書表現能力相関表

書表現能力 \ 知能	16~20	21~25	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80	81~85
65~61									2	2	3	4		
60~56					1	3	6	6	21	4	3	1		1
55~51				1	2	10	15	24	15	3		1		
50~46				2	11	14	11	4	1					
45~41		1			8	7	1		1					
40~36		1			2	1	1	1						
35~31														
30~26	1													

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

ついて考察することが必要である。テスト三の適當性を見る為には、この五表が大切であり、分布図はその能力分布が対称曲線になる様に問題が作られるのが望ましいのであるが、標準化された評価法のない書の評価は極めて困難であり、テスト三による表現能力評価には一人について略25分の時間を質してその正確を期する様に労めた。評価の結果は更に偏差値に換算され、これを分布図より見れば略対称曲線に近いように思われ、書写文字の形式内容、或はその評価が略適正であつたと考えられる。6表による一般知能と書表現能力との相関は0.69であつて両者の関連の相当高い事を示している。次にこの両者を一般知能の高い順に表記したのが七表である。この表から、(1)同じ知

七表 一般知能高点順と書表現能力



数でも表現能力には差がある。(2)略知能指数の高い者は書写能力もよい傾向が見られ(3)知能指数の移動につれて書能力も移動して行くが、(4)知数の高い者の方が、表現能力もすぐれる傾向を示している。(5)各知能指数間の書写最高点は知数の下るに随つて下つて行く傾向が見られるように思われる。(6)知能指数のよい者の表現能力は、指数よりも上回る傾向が見られる。

更に一般知能と表現力との相関を明らかにする為に、知能の因子と見られる知覚、記憶、意志、思考、器用さ等に対して考察を進めることとする。

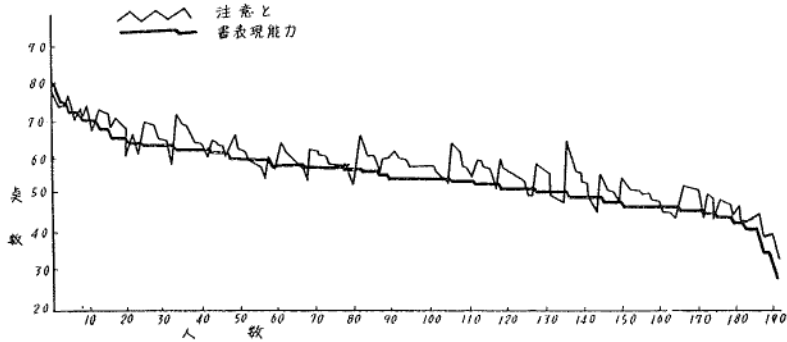
八表 知覚注意力と書表現能力相関表

		-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5
知覚	書能力	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80
	+4	80~76										1
+3	75~71								1	5	5	1
+2	70~66							1	9	4		
+1	65~61					1	5	11	14	1		
0	60~56					3	23	33	3	1		
-1	55~51					17	13	5				
-2	50~46				5	9	6					
-3	45~41				4	2						
-4	40~36		2									
-5	35~31	1										

(イ) 書表現能力と注意力の相関について

この場合の注意力は、形態、用筆、運筆、全体観を内容としている。八表の相関 r は 0.95 で極めて高い相関がある。即ち表現が豊かである為には、全体を通して注意力が優れ、これを維持して行く能力、同化過程を通しての注意は明確に意識的に集中されなければならないと思われる。

九表 書表現能力と注意



(ロ) 書表現能力と記憶との相関について

両者の相関は 0.613 であり、高い相関のある事を示している。即ち能力がすぐれる為には、はつきりした記憶像と、更に再生し意識にもたらず能力、明確さが痕跡よりも強くなければ表現は記憶以前のものとなるのであろう。

十表 記憶力と書表現能力相関表

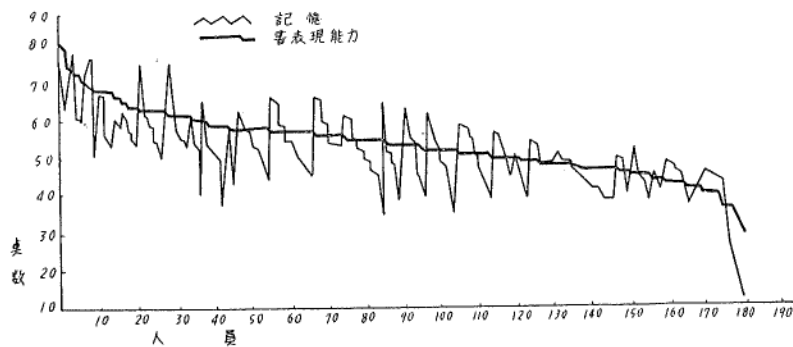
書 能 力 \ 記 憶 力		-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5
		26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80
+6	80~76								2	1	1	
+5	75~71										1	1
+4	70~66						1	2	1	3		
+3	65~61					1	3	4	6	1	3	1
+2	60~56					1	7	9	3	2	1	
+1	55~51				1	4	14	18	11	3		
0	50~46				4	16	8	12	1	1		
-1	45~41		1		2	3	7	5	1			
-2	40~36				3	5	5	0	2			
-3	35~31						2					
-4	30~26		1			1						
-5	25~21											
-6	20~16											
-7	15~11	1										

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

㊦ 書表現能力と意志との相関について

意志と表現との相関は 0.67 で相当な関連のある事を示している。書表現という複雑な行為に際して働く意志力の旺盛さ、軟かな毛筆を使いこなす気力や最後まで書き上げようとする意欲、手本に似せようとする態度等の意志活動力が大切なのである。

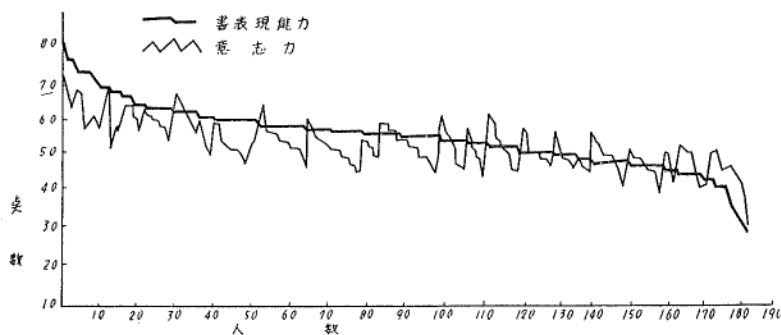
十一表 記憶力と書表現能力



十二表 意志力と書表現能力相関表

意志 力	書表現能力										
	-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5
	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80
+4											1
+3								1	1	3	
+2						2	1	8	4	2	1
+1					3	8	12	8	5	2	
0				4	8	22	27	7	1		
-1		1		2	14	13	9	3			
-2		1		3	4	3					
-3					3						
-4	1										

十三表 意志力と書表現能力



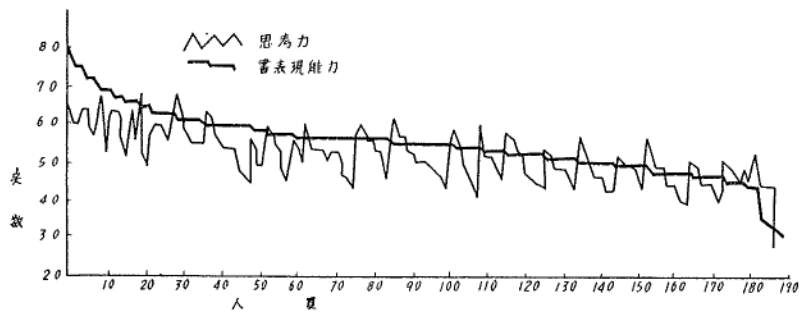
(二) 思考力と表現について

両者の相関は0.67で相当高い関連のあることが理解される。優れた表現をする為には知覚、記憶、意志等と共に手本に対しての連想とか論理的関係の把握が大切なのであつて、表現しようとする目的に自己を調和させようとする能力が思考、知性によるものと考えられる。

十四表 思考力と表現能力相関表

思考力 \ 書表現能力	-5	-4	-3	-2	-1	0	+1	+2	+3	+4	+5
	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80
+4	70~66							2	1	1	
+3	65~61						3	2	4	1	2
+2	60~56				1	9	10	12	2	4	
+1	55~51			1	5	12	19	9	4		
0	50~46	1		5	16	17	14	2			
-1	45~41	2		3	6	9	4				
-2	40~36				4						
-3	35~31										
-4	30~26	1									

十五表 思考力と表現能力



ホ 形態と知性の相関について

① 知覚と形態との相関について

形と知覚の相関は0.75で相当高い相関が見られ、

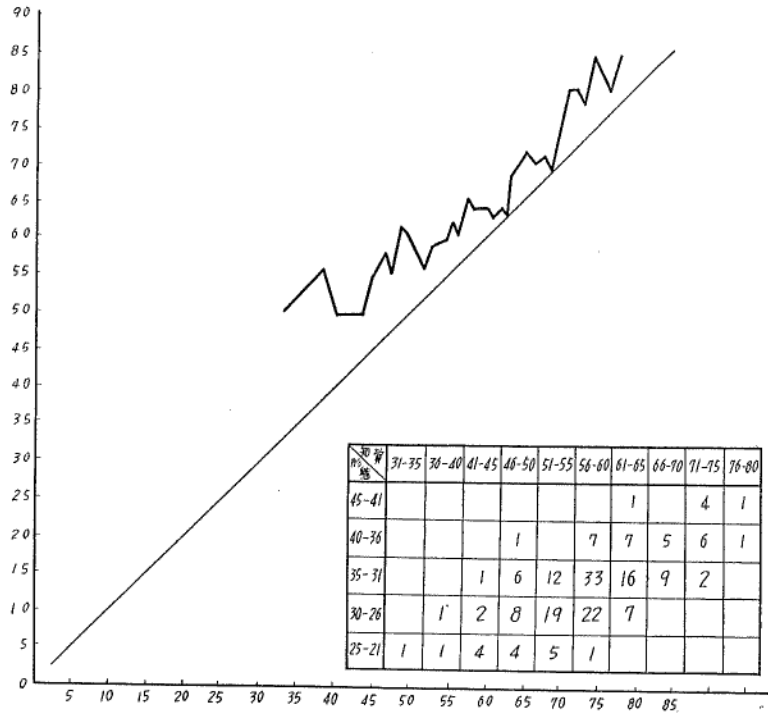
1. 注意力が形態構成要素の線における長短、曲直、太さ、方向、間架、用筆、運筆、全体性に細かに及ぶ程形態が優れるのである。
2. 注意力のおとるにつれて形態点との開きが大きくなる傾向が見られる。

② 記憶力と形態との相関について

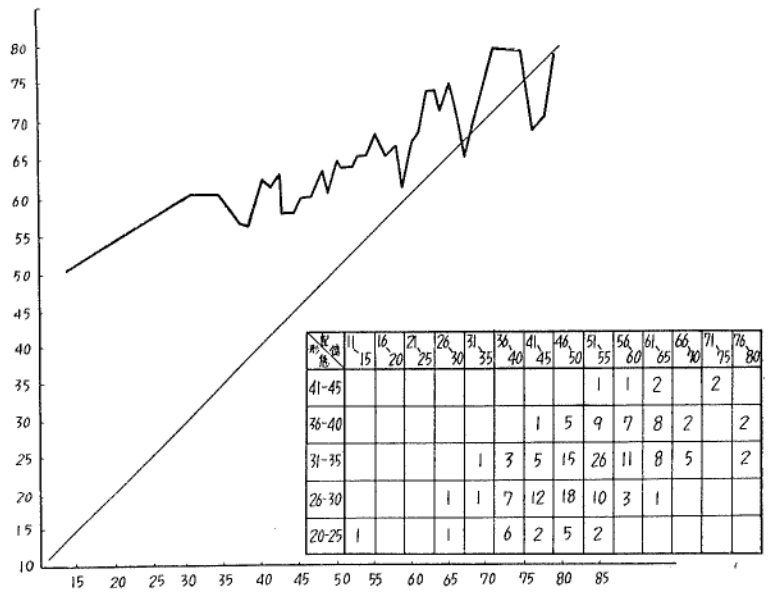
17表は記憶力と形態についての相関図であり、その相関は0.57であり、記憶力の豊かさは形態を正しく表現するのであろうけれども、刺激以前の記憶痕跡が大きい時には、新しい刺激に対する同化は困難になる様に思われる。両者の開きは記憶力の下るにつれて、書写表現が大きく下る傾向が見られる。記憶力の鋭さは注意力と相まつて、記憶像を再表現しようとする意志力と深い関

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

十六表 形態と知覚相関表



十七表 形態と記憶相関表



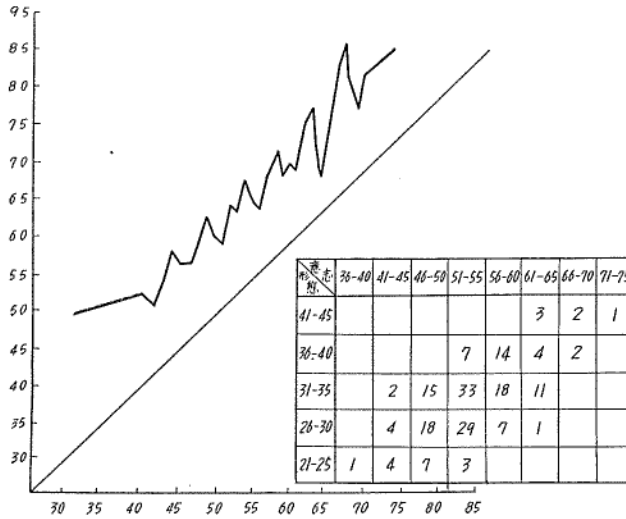
連があるように考えられる。

③ 意志力と形態との相関について

18表は形態と意志力との相関表であり、その相関は 0.76 であつて相当高い相関があり、旺盛な意

志力は感情をかりたてて活動的の精彩のある形態を、消極的意欲は静的温雅、優美な形態をつくるのに役立つている。

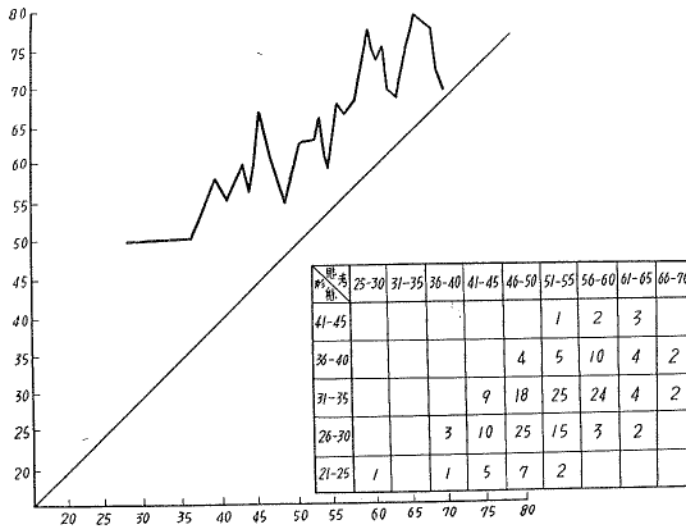
十八表 形態と意志力相関表



④ 思考と形態の相関について

19表は、形態と思考力との相関図表で、両者の相関は0.54であつて、よりよい形態を表現する為には、思考力、全体的関連性、連想力、書構成原理の把握等が大きく関連している様に考えられる。

十九表 形態と思考との相関表



⑤ 形態と知能について

注意力による記憶書形を表現しようとする時、自己の感情、意志等を表現しようとする書形に調和させなければならない。その為には、

書道に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

1. 注意力が細かに行きわたること。
2. 書形の合理的なとらえ方をしなければならない。
3. 知能因子の反応が、かたよらないでお互に協応することが望ましいと考えられる。

〔3〕 気質、感情、一般知能と書表現について

書が断続する線によつて形象化される時、造型芸術の中でも特に線の芸術だといわれ、時間性の契機が重視されなければならない。運筆と用筆によつて刻々と形づくられて行くリズムは単なる形態的リズムではなくて、持続する生命的リズムであり、人間性回復へのリズムであり性格、感情、知性等と密接に関連しながら形象化されて行く、即ち線の美、型の美を生命とする書は、それ自体が精神の所産であり、専ら線によつて形象化され、視覚的には、一筋の意識、知性の流れに沿つて純粋に、時間的精神の推移を特色としながら表現される。その抽象形態は、気質、感情、知性等によつて支配され、感情は、未決定要素としての速さ、強さ、太さ、長短、墨色、用筆、形態に、線は線質として硬軟、粗滑、太さ、墨色、強さ等となり、知性は形態、用筆、運筆、余白、全体性に関連し、これらは自己中心的に選択され、こゝに人格の特徴が入り込む様に考えられる。

(1) 運筆と血液型との関連について

20表、21表は運筆と血液型との相関表であり両者の相関は、独立性による検定の結果 χ^2_0 は男女では22.4、男子は19.2、その自由度は12.59である。随つて両者の関連は、サウンドツクの運筆が、性格の診断に重要であるとの考え方と一致している事が理解される。20表、21表、22表から、A型は衝動が目立たず、意志的弱さとしての優しい遅い運筆、B型、O型は情的強さとしての速い運筆、A B型は、情的、流暢さとしての一貫的リズム運筆が考察出来る。

二十表 運筆と血液型相関表

速度 型	速			遅		
	速	遅	律動	速	遅	律動
A型	16 29.6%	21 34%	3 6.8%	9 29%	11 42.3%	
B型	18 33.3%	12 19.5%	10 22.7%	10 32.3%	6 23.1%	4 17.4%
A B型	10 18.5%	13 21.3%	17 38.7%	5 16%	6 23%	9 39%
O型	10 18.5%	16 25.8%	14 31.8%	7 22.6%	3 11.6%	10 43.5%
計	54 33.75%	62 38.75%	44 27.5%	31 38.75%	26 32.5%	23 28.75%

(160)

(80)

二十一表 運筆と血液型について

速度 型	速				遅				律動			
	A型	B型	A B型	O型	A型	B型	A B型	O型	A型	B型	A B型	O型
速	2	1	3	3	2	1	4	3				
遅	1	4	3	2	1	2	2	3				
律動	4	3	1	2		3	2	1				

(160)

(80)

二十二表

血液型における
運筆の好み順

	速	遅	律動
A型	2	1	3
B型	1	2	3
A B型	3	2	1
O型	3	2	1

(2) 速さと感情の相関について

二十三表 速さと感情相関表

速さ 感情	速+1	緩○	遅-1	計
-2		25	175	200
-1		130	70	200
0		380	20	400
+1	300	100		400
+2	600	60	140	800

長さ1mの速さについて
 速い……0.5秒
 緩 ……2秒~2.5秒
 遅い……4秒

23表による両者の相関は 0.643 であり高い順相関のあることが理解される。即ち速度の大きさは感情の強さと、速度の小ささは感情の弱さとなり、速さにおける速、緩、遅は精神的感度即感動を示している。

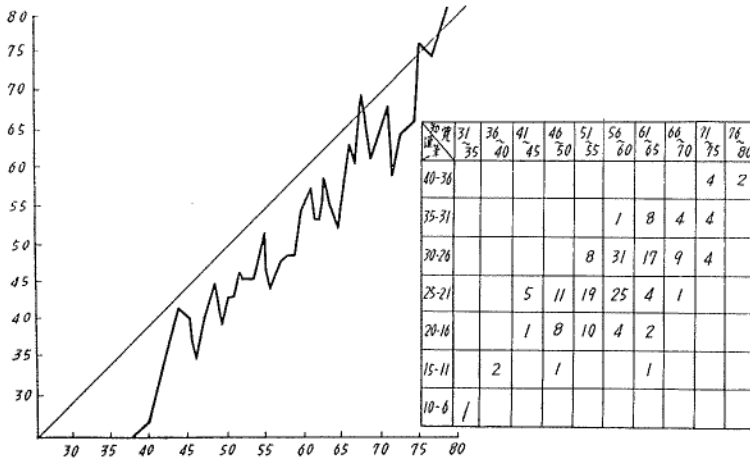
(3) 運びと知性との相関について

意識的知覚は、注意の集中によつて、思考や論理性をおび、運動性や情緒性を拘束するかも知れないが、知性、主観性、集中的、拡大的相互関係、模倣力器用さ等は、目と手の協応としての巧みな運びとなつて表現されるように思われる。

1) 知覚と運筆について

二十四表は、知覚と運筆の相関表であり、その相関は 0.713 で高い関連のあることを示している。即ち知覚注意力の細かなものは、運筆の表現もよく調整が出来るのであろう。

二十四表 知覚と運筆相関表



2) 記憶と運筆について

二十五表は記憶力と運筆の相関表で、両者の相関は 0.45 で、最も低い関係におかれている。即ち運筆は運動感覚的で瞬間的・時間的なものである為、その把握表現が最も困難なものと思われる。

3) 思考と運筆の相関について

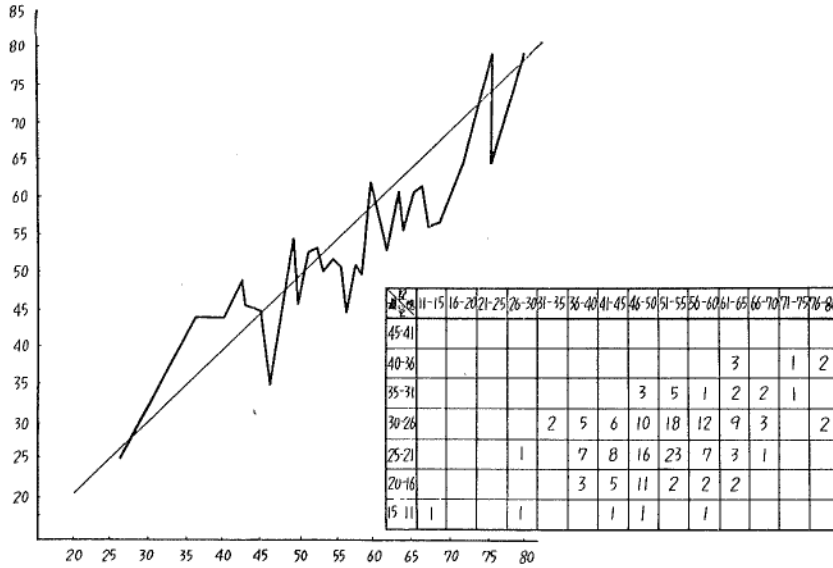
26表は、思考と運筆との相関表であり、その相関は 0.56 で、論理的機能に関連性があり、運筆は意識的、無意識の中に働く力が大きいように考えられる。思考が余り強すぎる場合は内向的色彩をおびて、その運筆を拘束し、暢達性、自由性、遠勢、浮沈抑揚、リズム等手と腕の調整が拘束されるのであろう。

4) 意志と運筆の相関について

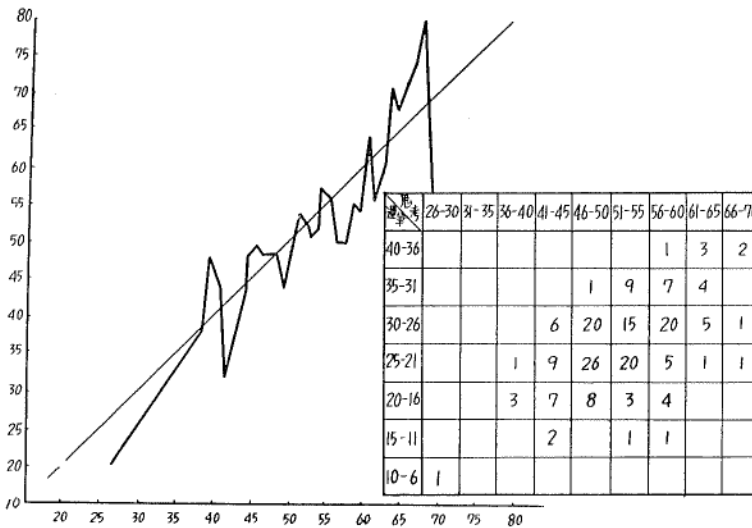
27表は、意志と運筆との相関表であり、その相関は 0.56 で、両者の間には割に関連のあることを示している。即ち、その書体のもつ特有の運筆に調和する為の流動性、情緒性の働き、気質、感情は、意志そのものの通りにはならないが、表現する目的概念に沿う様、意志そのものは働いている

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

二十五表 記憶と運筆相関表



二十六表 思考力と運筆相関表



のであろう。

5) 速さと一般知能との相関について

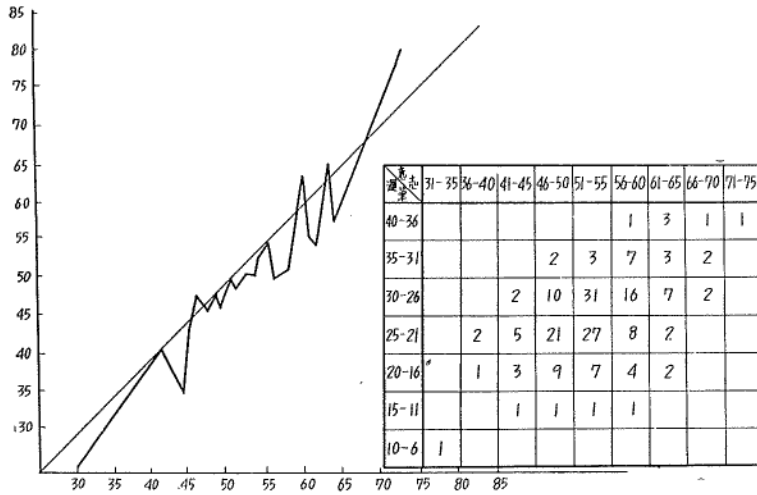
28表は三十分間に臨書した(半紙一枚に四十八字書)楷書、行書字数と一般知能との相関表で、その相関は 0.156 であり書写速度と一般知能との連関は殆んど考えられなく、速度は感情と関連している。

(4) 感情と線について

1. 線の方向曲直と感情との相関について

線の方向、曲直と感情との相関は 0.90 で両者の関連は極めて高い。即ち、線の方向曲直は、形態

二十七表 意志力と運筆相関表



二十八表 書写速度と知能相関表
(半紙四十八字詰に三十分間に臨書した毛筆字数)

書写力 字数	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80	81~85	86~90	91~95	96~100
61~65	1		2		3	1	3			1					
56~60		1	5	11	6	6	4	1	2						1
51~55		1	9	13	13	9	14	4	2	4					
46~50			9	6	6	10	8	1	2		2				
41~45		1	2	2	3	5	4	1		1					
36~40		1	1		1	1	1		1						
31~35															
26~30					1										

二十九表 方向曲直と感情相関表

感情	+2	+1	0	-1	-2
-2			5	5	200
-1			10	190	10
0			40	380	
+1	170	220	5	25	
+2	690	70	40		

+2 …45度直線
 +1 …やゝ曲線右肩上り
 0 …水 平
 -1 …5度位の曲線
 -2 …130 度位

構成の第一要素であり、その形態の美的感情に及ぼす関係については、A型は平静温健消極として 0~+1 を示し、B型、O型は積極性、活動性、強い情緒としての +2 を示している。

2. 線の長短と感情との相関について

線の長短は、線の方向と共に形態決定の要素であり、線長短と感情との相関は 0.55 であり、暢達性、自由性、瞬間性、消極性の感情を象徴している。A型は受動的やさしさから線の短くなる傾向を、O型B型は積極的強さから長くなる傾向が見られる。

3. 太さと感情との相関について

線の太さは、表現性として厚さの相違を表現し、意志の

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

三十表

線の長短と感情相関表

長短 感情	短	長短	長
-2	85	25	
-1	90	20	
0		50	170
+1		110	110
+2	10	190	240

三十一表

太さと感情相関表

太さ 感情	太+1	中0	細い-1
-2		13	287
-1		10	140
0		270	30
+1	180	120	
+2	560	40	

太さ 1m 5cm幅
中 1m 2cm
細 1m 0.5cm

強弱と結びついて、開放的安心感、豊かさ、冷やかさ、繊細、ゆるみ、弱さ、神経質等の感情を象徴している。両者の相関は0.91であつて、相関の極めて高い事を示し人の感動に大きな意義をもっている。

更に太さは線の速さ、軽重と関連して意志力性質となつて、形態に結びつき、太さと関連する形態と感情としてのO型は意力的に形と質を表現している。

4. 入終筆転折と感情との相関について

この両者の相関は0.88であり高い関連のあることを示している。即ち線の始終転折に見られる強弱、鋭鈍は、線の張力として精神活動の躍動を象徴している。

(5) 用筆と知性の相関について

三十二表 入終筆転折と感情相関表

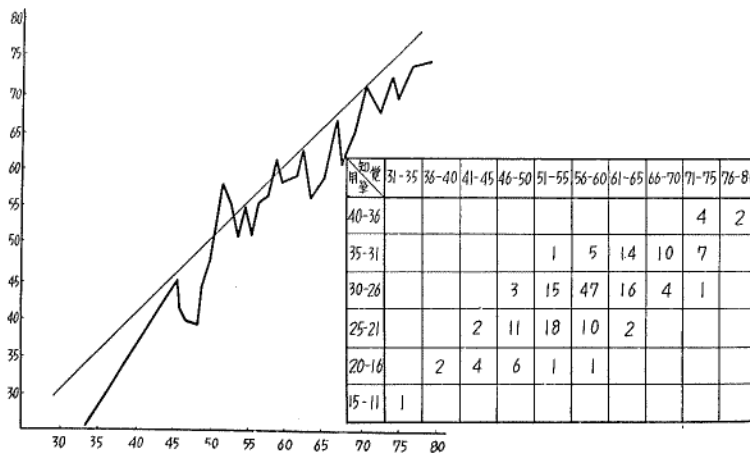
入終筆 感情	廟堂碑 -1	願文 +1	六朝体 +2	吹陽詢 +3	顔真卿 +4	褚遂良 +5
-2	180	40				
-1	50	60				
0		220				
+1			120	90	3	2
+2				190	150	100

イ、知覚と用筆との相関について

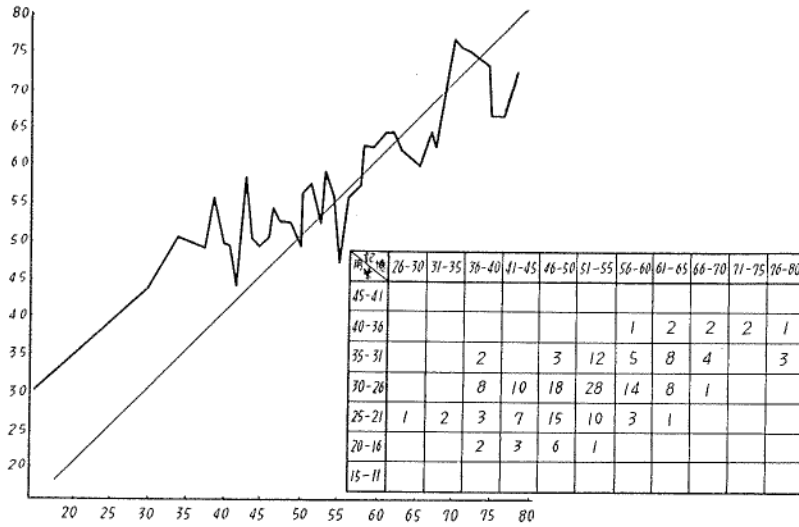
知覚と用筆の相関は0.91で、両者の関連の極めて高いことを示している。即ち知覚力の豊かさ、細さ等は、用筆を正しく技術化する為の最も重要な要素の様に思われる。更に知覚は、思考や情緒と結合して、用筆を時間知覚なものとして把握するのではないかと考えられる。

ロ、記憶と用筆についての相関について

三十三表 知覚と用筆相関表



三十四表 記憶と用筆相関表



記憶と用筆の相関は0.68で、相当高い相関が見られる。即ち示範に対しての秀でた記憶力は表現を豊かな優れたものにするのである。いろいろの書体、書風には、それぞれ特有の用筆があり、その用筆は運筆と相まつて（用筆と運筆の相関は0.79）表現を優れたものに行っているであろう。

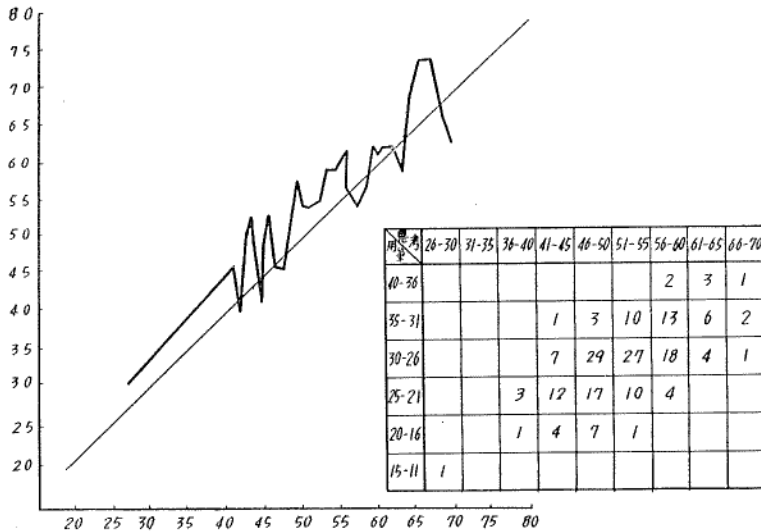
ハ、用筆と思考との相関について

35表は用筆と思考との相関であつて、両者の相関は0.6となり、深い関連のあることが理解される。正しく美しい用筆をする為には、用筆に対する連想、論理的な原理の把握等が大きく関連しているものと思われる。即ち合理的論理的用筆の究明は、書を美的な形態として表現するのである。

ニ、用筆と意志との相関について

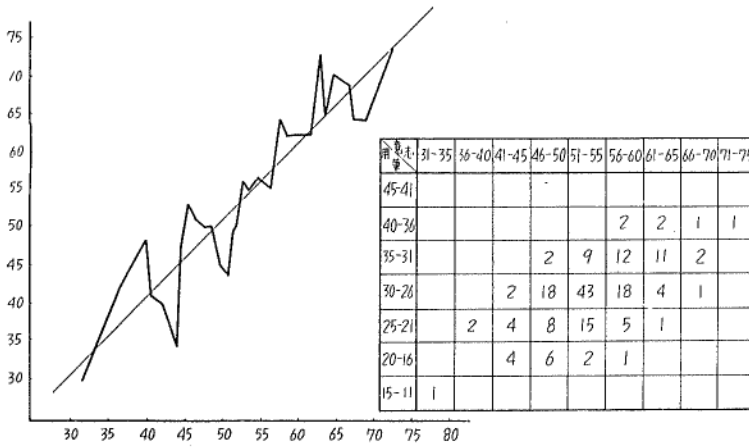
36表は用筆と意志との相関表で、その相関は0.58で、両者の関連の深いことを示している。即ち

三十五表 思考と用筆相関表



書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

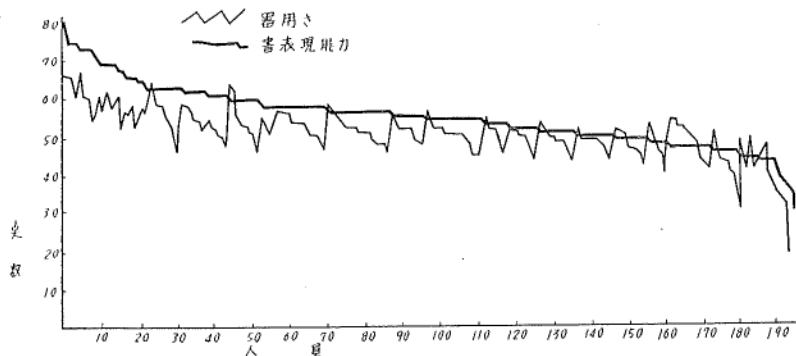
三十六表 意志力と用筆相関表



三十七表 器用さと書表現能力相関表

書能力 器用	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80
66~70										1	1
61~65							2	2	1	2	
56~60						1	8	10	6	2	1
51~55					7	15	22	11	3	1	
46~50				3	11	28	15	4			
41~45				4	10	4	3	1			
36~40				2	1	1					
31~35		2			1						
20	1										

三十八表 書表現能力順位と器用さ



表現しようとする用筆をする為には、意欲的態度、旺盛な意志力が、流動的に情緒的働きとして、大きく関連するものであろう。

(6) 器用さと書表現能力について

器用と書表現に関する相関表は37表で、38表は書写表現高点順に器用さを表わしている。その相関は0.84であつて、書表現能力と器用さとの関連は極めて大きい。更に器用さと形の相関は0.55、器用さと用筆の相関は0.63 器用さと運筆の相関は0.58 であつて、目と手の協応の巧みさを物語つていられるように思われる。即ち器用さは手や腕の調整と関連して模倣的になり易い。

〔4〕 墨色と気質、感情との相関について

1) 墨色と気質の関連について

三十九表 墨色と気質について

墨色 感情	濃 潤		変 化 性	
	濃 潤	変 化 性	濃 潤	変 化 性
A 型	34 34%	6 10%	15 34.9%	6 13.5%
B 型	27 27%	13 21%	12 27.9%	8 21.6%
A B 型	21 21%	19 31.7%	10 23.4%	10 27%
O 型	18 18%	22 36.7%	6 16.3%	14 37.8%
	100 62.5%	60 37.5%	43 53.75%	37 46.25%
	160		80	

39表40表は墨色と気質の相関表であり、カイ二乗の独立性の検定による $\chi^2_{0.05}$ は男女では 12.8、男子では 10.4、その自由度は 7,815 であるからこの両者の関係は成立し、次のように考えることが出来る。A型は濃潤な墨色を好んで変化のある墨色を好まないのに反し、O型は変化ある墨色を好んで、単純な墨色を好まない。B型、A B型はその中間性をとる傾向が見られ、女子は一般に濃潤な墨色を好むのに比べて、男子は変化ある墨色を好む傾向が見られることは知的面よりも主として性格、情緒的関連が大きい為であらう。墨色と形態を単一の中に見たり表現する事は複合的な能力であつて、料紙の上に書かれる書は、型の抽象性と共に墨色の抽象性が生命的リズムの純粹性を確保するのに適している様に思われる。墨の本質については、墨の色感としての主張性、明確性、堅固性、単純性が問題であり、運筆速度の増すにつれて、その墨色にも潤、濁、滲、濃淡の変化が見られ、滲、濁、淡は墨の明確性を失うことにはなるけれども、墨技に変化性をもたらし、書く者の

四十表 墨色の好みと気質についての順位表

	A 型	B 型	A B 型	O 型	A 型	B 型	A B 型	O 型
濃 潤	1	2	3	4	1	2	3	4
変 化	4	3	2	1	4	3	2	1

(160)

(80)

墨色に対する情緒的感性と関連しているものと思われる。墨色は更に心理的な面も加わつて人による好嫌は多分に各個人の気質にも関連しているものと考えられ、直接的に墨色の性質に入り込んで、その深さ、暖かさ、色調等を我々の感情と一致させている。

2) 墨色と感情との相関について

41表は墨色と感情との相関表で、その相関は0.94となり極めて高い相関を示している。線は一方に速さ、太さをもつて、他方は墨色をもつて表現される。今濃淡の表現性を考察すれば、濃墨は太さ、長さに関連して積極的強勢の重い方向、淡墨は太さと関連して消極的弱さの軽軟の方向を示し、感動の増大化や速さと直接的に結合する様に思われる。線の重さと濃淡の関連については、重濃は強勢、軽淡は弱勢の方向に傾き、重軽の線性質が濃淡と相伴つて更に感情は強調されるであらう。速さと濃淡の結合は、速濃は強勢として変化が大きく、遅淡は弱勢として静的として変化がゆるやかであり、精神的感度即ち感動を示している。即ち墨色による刺激は感情と著しい相関が見られその強度は感情と一定の関連をもち、中庸な墨色には快感を伴い、強すぎる場合は不快感、弱す

書道上に於ける書く技術と、個人の気質、感情及び知能率との相関関係に就いて

四十一表 墨色感情相関表

墨色 感情	淡滲 -4	淡 -3	淡渴 -2	淡濃 -1	普通 0	やゝ渴 +1	濃渴 +2	濃滲 +3	
-2	250	115	25						
-1	15	90	270	15					
0				107	240	43			
+1					70	250	70		
+2						27	335	28	
									1950

ぎる墨色は殆んど感情を起さない様に考えられる。

参 考 文 献

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. 国語実験学校の研究報告 | 11. 実験心理学 |
| 2. 心理学大系 | 12. 線の研究 |
| 3. 心理学概論 | 13. 書の創作 |
| 4. 発達心理学 | 14. 書道全集 |
| 5. 芸術教育と心理 | 15. 精神診断学 |
| 6. 知能測定法 | 16. 性格の診断 |
| 7. 精神発達の心理 | 17. 人格診断法 |
| 8. 生命と精神の心理学 | 18. 教育診断法 |
| 9. 異常心理学 | 19. 教育と心理の為の推計学 |
| 10. 感情心理 | 20. 統計学 |